

平成 19 年度理事会、評議員会ならびに総会における報告承認決定事項

第 50 回社団法人日本糖尿病学会年次学術集会は、岡芳知会長主宰のもとに平成 19 年 5 月 24, 25, 26 日の 3 日間、仙台サンプラザ、他において開催された。これに先立つ理事会、評議員会は 5 月 23 日ホテルメトロポリタン仙台にて、また総会はサンプラザホールにて開催された。

1. 第 50 回社団法人日本糖尿病学会年次学術集会の 経過報告 (岡会長)

去る平成 19 年 5 月 24 日から 26 日の 3 日間、仙台サンプラザホールをメイン会場として、第 50 回日本糖尿病学会年次学術集会を開催しました。本会のメインテーマを「糖尿病とたたかう 人類の叡智と選択」といたしました。「糖尿病とたたかう」ために、研究者、医師、看護師、薬剤師、管理栄養士、検査技師、理学療法士など、多岐の職種にわたる方々が糖尿病学と糖尿病診療についての最新の進歩を学び情報を交換するための重要な場が年次学術集会です。「人類」全体で問題になっている糖尿病に対し、「叡智」とは、最先端の生命科学や新しい糖尿病ケアのあり方を表し、「選択」とは、肥満の増加・食生活の変化などに対し、我々人類がどのような道を選ぶべきかを表したつもりです。

このようなメインテーマのもと、特別講演 2 題、シンポジウム 21 題(4 題は英語セッション)、特別企画 1 題(英語セッション)、ラウンドテーブルディスカッション 1 題(英語セッション)、教育講演 13 題を用意しました。また、昨年の学会が最初の試みであったディベートセッションは、論点が何かを整理する上でも役立つと思いましたので、今回も取り上げ、2 題企画しました。ひとつは「正常」空腹時血糖上限値について、海外からの 3 人の演者を交えての英語セッションでしたので、我々にはかなりの重荷でしたが、内容は好評であったように思います。学術集会の国際化のためにも、少し無理をしてでも英語セッションを続けることが必要だと感じました。この点、英語を苦にしない若い世代が増えているのは心強い限りです。また、ポスター演題のうち高い評価を得たものをプレジデントポスターとして夕刻にまとめ、展示会場で大型プラズマディスプレーを用いて口演発表の機会を設けました。これには、特に若い会員に口頭発表のトレーニング機会を増やしたいという意図もありました。その際に会場におきました、仙台の日本酒、笹蒲鉾などは大変好評であったようで喜んでおります。

残念な点は、2 日目 25 日(金)午後より雨になり、ポスター会場との移動でご迷惑をおかけしたこと

す。週はじめには雨は予想できましたので、バス増便などの対策も立てておりましたが、激しい雨には太刀打ちできませんでした。深くお詫び申し上げます。応募演題総数 1,651 と過去最多となり、有料学会参加者数は約 8,400 名に達しました。学会最終日に開催した市民公開講座には 1368 名の参加を得て、大盛況となりました。

本学術集会にご協力いただきました会員各位にあらためてお礼申し上げます。

2. 平成 18 年度事業報告および庶務報告(岩本理事)

●事業報告

1) 第 49 回年次学術集会

会長 田嶋尚子(東京慈恵会医科大学糖尿病・代謝・内分泌内科)

会期 平成 18 年 5 月 25・26・27 日(木・金・土)

会場 東京国際フォーラム、他

参加者 9,646 名

○会長講演 グローバル化する糖尿病 アジアからの発信

○特別講演 いのちについて考える—50 年を顧みて—

○特別講演 The Global Impact of Diabetes—The Case for a United Nations Resolution on Diabetes

○学会賞受賞講演

ハーゲドーン賞 糖のながれにおける肝糖取り込み率制御因子の解明

リリー賞 ①脂肪細胞由来の抗糖尿病・抗動脈硬化ホルモン、アディポネクチンの受容体同定と作用メカニズム・病態生理学的意義の解明

②グルコースホメオスタシスにおける ATP 感受性 K^+ チャネルの重要性—遺伝子改変動物による研究—

○シンポジウム

1. メタボリックシンドロームと糖尿病：病態と

- 定義をめぐって 他 16 題
- 教育講演
1. これからの糖尿病対策 他 12 題
- 市民公開講座「血糖値を上げない生活の知恵」
- テーマ：「糖尿病にならないために 今日から始
められる糖尿病予防」
- 口演発表 525 題
- ポスター 1,004 題
- 2) 出版事業
- ①会誌「糖尿病」第 49巻4号, サプルメント1(抄録
集)～第 50巻3号を発行
- ②糖尿病患者向け指導書
- i 糖尿病食事療法のための食品交換表 第6版
300,000 部発行
- ii 糖尿病治療の手びき 増刷なし
- iii 糖尿病性腎症の食品交換表 15,000 部発行
- iv 糖尿病食事療法のための食品交換表 CD-ROM
2,000 部発行
- v 糖尿病性腎症の食品交換表 CD-ROM 付き
増刷なし
- vi Food Exchange List 増刷なし
- ③医師, コ・メディカル向け指導書
- i 子どもの糖尿病・サマーキャンプの手引き
増刷なし
- ii 糖尿病食事療法指導のてびき 増刷なし
- iii 糖尿病療養指導の手びき 増刷なし
- iv 糖尿病治療ガイド 2006-2007 20,000 部発行
- v 糖尿病学用語集 増刷なし
- vi 糖尿病遺伝子診断ガイド 増刷なし
- vii 糖尿病専門医研修ガイドブック 増刷なし
- viii 小児・思春期糖尿病管理の手びき 増刷なし
- ix 糖尿病学の進歩 1,200 部発行
- x 糖尿病の療養指導 1,200 部発行
- xi 科学的根拠に基づく糖尿病診療ガイドライン
500 部発行
- 3) 第 41 回「糖尿病学の進歩」
- 世話人 羽田勝計(旭川医科大学内科学講座(病態
代謝内科学分野))
- 会期 平成 18 年 9 月 29・30 日(金・土)
- 会場 北海道厚生年金会館・札幌市教育文化会
館・ロイトン札幌
- 参加者 2,742 名
- ①第 1 日目
- A 会場
- レクチャー：糖尿病療養指導に必要な知識(1)
1. 糖尿病の概念と分類 他 5 題
- レクチャー：糖尿病療養指導に必要な知識(2)
1. 急性合併症に対するマネージメント
他 7 題
- B 会場
- レクチャー：1 型糖尿病診療の update
1. 1 型糖尿病の成因～遺伝因子～
他 5 題
- レクチャー：2 型糖尿病診療の update
1. 2 型糖尿病の成因～遺伝因子～
他 7 題
- C 会場
- レクチャー：糖尿病の成因と病態に関する研究
の進歩(1)(β 細胞とインスリン分
泌)
1. 腺 β 細胞障害の分子機構 他 5 題
- レクチャー：糖尿病の成因と病態に関する研究
の進歩(2)(インスリン抵抗性)
1. インスリンによる糖取り込み調節機構の新
知見 他 7 題
- D 会場
- シンポジウム：糖尿病網膜症の克服をめざして
他 4 題
1. 糖尿病網膜症の成因と進展機構—網膜症は
炎症か?—
- シンポジウム：糖尿病腎症の克服をめざして
1. 腎症の成因 他 5 題
- ②2 日目
- A 会場
- レクチャー：糖尿病療養指導に必要な知識(3)
1. 療養指導とクリニカルパス 他 5 題
- レクチャー：特別な配慮を要する糖尿病管理
1. 妊娠糖尿病(内科側から) 他 6 題
- B 会場
- シンポジウム：組織的な糖尿病対策の現状
1. 厚生労働省における糖尿病対策の推進
他 6 題
- Off-line discussion
1. 糖尿病性の多発合併症があるためマネージ
メントに難渋した症例 他 1 題
- C 会場
- レクチャー：糖尿病の成因と病態に関する研究
の進歩
1. 腺 β 細胞ブドウ糖毒性の分子機構
他 5 題
- レクチャー：近未来の糖尿病診療の可能性
1. 多項目危険因子同時検出と指標としてのク
ッキーテストの意義 他 6 題
- D 会場

○シンポジウム：糖尿病神経障害の克服をめざして

1. 糖尿病神経障害の成因 他4題

○シンポジウム：大血管症の克服をめざして

1. 大血管症の成因 他5題

4) 地方会活動

1. 第40回日本糖尿病学会北海道地方会

会 期 平成18年10月29日(日)

会 場 北海道大学学術交流会館

会 長 小池隆夫(北海道大学大学院医学研究科
病態内科学講座・第二内科)

参加者 455名

2. 第44回日本糖尿病学会東北地方会

会 期 平成18年11月4日(土)

会 場 仙台国際センター

会 長 岡 芳知(東北大学大学院医学系研究科
分子代謝病態学)

参加者 500名

3. 第44回日本糖尿病学会関東甲信越地方会

会 期 平成19年1月27日(土)

会 場 パシフィコ横浜会議センター

会 長 小林哲郎(山梨大学医学部附属病院第三
内科)

参加者 1,271名

4. ①第74回日本糖尿病学会中部地方会

会 期 平成18年10月28日(土)

会 場 愛知医科大学構内(本館)

会 長 大竹千生(愛知医科大学内分泌・代謝・
糖尿病内科)

参加者 360名

②第75回日本糖尿病学会中部地方会

会 期 平成19年3月17日(土)

会 場 三重県医師会館

会 長 住田安弘(三重大学医学部第三内科)

参加者 315名

5. 第43回日本糖尿病学会近畿地方会

会 期 平成18年11月18日(土)

会 場 国立京都国際会館

会 長 葛谷英嗣(独立行政法人国立病院機構京
都医療センター)

参加者 1,509名

6. 第44回日本糖尿病学会中国・四国地方会

会 期 平成18年11月17・18日(金・土)

会 場 岡山コンベンションセンター(ママカリ
フォーラム岡山)会 長 加来浩平(川崎医科大学糖尿病内分泌内
科)

参加者 719名

7. 第44回日本糖尿病学会九州地方会

会 期 平成18年10月13・14日(金・土)

会 場 アクロス福岡

会 長 梅田文夫(福岡市医師会成人病センタ
ー)

参加者 約1,500名

5) 分科会活動

第21回日本糖尿病合併症学会

会 期 平成18年10月6・7日(金・土)

会 場 弘前文化センターおよびホテルニュー
キヤッスル弘前会 長 八木橋操六(弘前大学医学部病理学第
一講座教授)

参加者 400名

6) 糖尿病週間

平成18年11月6日～12日、第42回全国糖尿病週
間の行事が一斉に行なわれた。テーマは「予備群から
生活習慣を」。

7) 国際糖尿病連合会議

- Executive Meeting of IDF (2006.5.5-7, コペンハ
ーゲン)への出席
- IDF-WPR Council Meeting (2006.6.29-7.1, 東京)
への出席
- Executive Meeting of IDF (2006.9.18, コペンハ
ーゲン)への出席
- IDF Council Meeting (2006.12.3, ケープタウン)
への出席
- 19th World Diabetes Congress, Cape Town 2006
への出席

8) 普及・啓発・後援事業

①第42回全国糖尿病週間の共催

期 間 平成18年11月6日(月)～12日(日)

②日本糖尿病協会への協力

「さかえ」および「つぼみ」発行の企画等

③糖尿病の予防と治療を目指してーグリコヘモグ
ロビン(HbA1c)認知向上運動ーの後援
平成18年6月4日

④第9回糖尿病地域医療研究会総会の後援

平成18年7月29日

⑤第6回糖尿病教育資源共有機構年次学術集会の
後援

平成18年8月4・5日

⑥第23回糖尿病 Up・Date 賢島セミナーの後援

平成18年8月26・27日
 ⑦第29回腎不全対策を語るつどいの後援
 平成18年9月17日
 ⑧第4回1型糖尿病研究会の後援
 平成18年10月7・8日
 ⑨第6回先進インスリン療法研究会の後援
 平成18年10月28日
 ⑩糖尿病予防キャンペーンの後援
 平成18年10月15・11月23日
 ⑪糖尿病シンポジウムの後援
 平成18年9月16日・10月14日・11月11・26日
 ⑫平成18年度「食育健康サミット」の後援
 平成18年12月7日
 ⑬第18回分子糖尿病学シンポジウムの後援
 平成18年12月9日
 ⑭第30回腎不全対策を語るつどいの後援
 平成19年1月28日
 ⑮第21回日本糖尿病動物研究会年次学術集会の後援
 平成19年2月9・10日
 ⑯メタボリックシンдром撲滅運動キャンペーンの後援
 平成18年1月20日～平成19年3月31日
 ⑰糖尿病キャンペーン「なくそう 減らそう 糖尿病」の後援
 平成19年3月1日～7月31日

●庶務報告

1)総会

平成18年5月25日、東京国際フォーラムにて第49回通常総会を開催した。平成17年度事業報告、庶務報告、収支決算報告が承認され、また平成18年度補正予算ならびに平成19年度事業計画および予算が承認された。第52回会長に柏木厚典学術評議員が選出・承認された。

2)評議員会および学術評議員会

平成18年5月24日にそれぞれ開催された。

3)理事会

定例理事会は平成18年5月24日、12月10日、臨時理事会は平成18年8月21日、平成19年2月25日の合計4回開催された。

●会員状況報告(平成19年3月31日現在)

1. 役員等

1)役員

理事 18名(17年度末 18名)
 監事 2名(17年度末 2名)

| | |
|------------|---|
| 2)学術評議員 | 585名(17年度末 588名, 物故1名, 退会1名) |
| 3)評議員 | 88名(17年度末 88名) |
| 2. 会員等 | |
| 1)名誉会員 | 28名(17年度末 27名, 1名追加) |
| 2)正会員 | |
| 18年3月末日会員数 | 15,028名 |
| 18年度新入会 | 937名 |
| 名誉会員へ | -1名 |
| 退会 | -484名 退会内訳: 会費未納 182名 希望退会 285名 物故 17名 |
| 正会員 現在数 | 15,480名(452名増) |
| 3)賛助会員 | |
| 18年3月末日会員数 | 39名 |
| 18年度新入会 | 1名 |
| 18年度退会 | -1名 |
| 合併 | -1名 |
| 賛助会員 現在数 | 38名(1名減) |

3. 物故会員

| | | |
|---------|------|-------------|
| 功労学術評議員 | 赤澤好温 | 松岡 瑛 |
| 学術評議員 | 板津武晴 | |
| 正会員 | 石井正次 | 上田賀美 上野博嗣 |
| | 内山洋子 | 大木 豊 海原昭人 |
| | 川口二郎 | 木村健一 近藤 敦 |
| | 中野桂佑 | 中村 仁 中村わかなか |
| | 碑田正志 | 横山直方 |

(敬称略、連絡のあった方のみ)

3. 委員会報告

1)「糖尿病」編集委員会 委員長 横野浩一
 委員会の開催: 6回(平成18年4月2日, 5月26日, 7月23日, 10月9日, 12月3日, 平成19年2月4日)

①出版状況: 第49巻4号から第50巻3号までの12誌とサブルメント1として「第49回年次学術集会抄録号」を発行した。詳細は次頁表の通りである。
 (下段: コメディカルコーナー)

②論文受付状況は、平成18年4月1日より平成19年3月31日までの論文投稿数122編、この期間に掲載可否の決定された99編のうち可となった論文76編、採択率77%であった。採択日から掲載までの期間は2～4カ月。

③主たる審議・検討事項

- (1)原著論文投稿数の減少に対して学術評議員への原著論文の投稿依頼
- (2)非学会員の投稿に関する投稿規定の一部改定

- (3) 推敲期間を超過している論文への再投稿通知について
- (4) 「糖尿病」誌の Medline 登録に関する検討
- (5) 編集委員による「特集」の企画立案

2) 「食品交換表」編集委員会 委員長 伊藤千賀子

(1) 食品交換表編集委員会は 5 月 25 日(木), 10 月 15 日(日), 平成 19 年 2 月 12 日(月・祭日)の 3 回と「食品交換表 活用編」作成のための作業部会を 12 月 17 日(日)と平成 19 年 1 月 8 日(月・祭日)に開催し, 2 月 17 日(日)に献立撮影を行った。

(2) 医学書院「糖尿病ハンドブック 第 2 版」の訴訟について

平成 18 年 5 月 12 日 訴訟の提起, 6 月 20 日 第 1 回口頭弁論, 9 月 12 日 第 2 回口頭弁論, 11 月 1 日 弁論準備手続. なお, 医学書院側は答弁書で, 学会側

に「食品交換表には著作人格権」はないと主張. 3 月 22 日 医学書院は被告第 3 準備書面を提出. 今後は 2 カ月後に学会弁護士による答弁書・委員長陳述書提出の予定.

(3) 出版事業(18 年 4 月 1 日~19 年 2 月 28 日, () は発行以降の累計部数)

出版事業は順調で食品交換表の出版部数も 190 万部に上った.

食品交換表 第 6 版—売上部数: 244,812 部
(1,770,892), 発行部数: (1,900,000)

糖尿病性腎症の食品交換表 第 2 版—売上部数: 9,264 部(58,045), 発行部数: 63,000

糖尿病食事療法指導のてびき 第 2 版—売上部数: 2,020 部(10,797), 発行部数: 13,000

食品交換表の英訳版—売上部数: 79 部(1,785), 発行部数: 2,000

| | 総頁数 | 原著 | 症例 | ミニレビュー | 報告 | 地方会抄録 | 委員会報告 | 特集 | 会報 | その他 |
|---------------|-------|-----------------|---------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|
| Vol. 49 No. 4 | 68 | 2 | 5 | | 1 | | | | | |
| Supplement 1 | 552 | 第 49 回年次学術集会抄録号 | | | | | | | | |
| No. 5 | 90 | 2 1 | 4 | | | 1 | 1 | | | |
| No. 6 | 100 | 1 2 | 6 | | | 1 | | | | |
| No. 7 | 124 | 1 1 | 7 | | | 1 | | | 1 | |
| No. 8 | 66 | 2 2 | 3 | 1 | | 1 | | | | |
| No. 9 | 64 | 2 2 | 4 | | | 1 | 1 | | | |
| No. 10 | 72 | 1 | 5 | | 1 | | 1 | | | 4 |
| No. 11 | 58 | 2 1 | 3 | | | | | 1 | | |
| No. 12 | 84 | 1 1 | 4 | | | | | 1 | | |
| Vol. 50 No. 1 | 128 | 3 1 | 3 | | | 1 | 1 | | 1 | |
| No. 2 | 62 | 2 1 | 3 | | | 1 | | | | |
| No. 3 | 44 | 1 2 | 3 | | | 1 | | | | |
| 合計 | 1,482 | 20 14 | 50 0 | 1 0 | 0 2 | 9 0 | 4 0 | 2 0 | 2 0 | 4 0 |

CD-ROM 版食品交換表(ver. 3)一売上部数：1,265部(4,673部), 発行部数：6,500
 CD-ROM 版(ver.2)付糖尿病性腎症の食品交換表一売上部数：255部(1,209), 発行部数：2,000
 「食品交換表 活用編」の出版：患者向けの書籍として当委員会が既に作成している6種類の献立集とその応用をイラストで示した。お惣菜を利用する場合の考え方や問題点を分かり易く解説した。平成19年5月に出版。
 (4)引用許可願(18年4月1日～19年2月28日)
 食品交換表(申請29件)：無条件許可13, 条件付き許可7, 不許可6, 取り下げ3
 腎症の食品交換表(申請4件)：無条件許可2, 条件付き許可1, 不許可1
 食事療法指導のてびき(申請1件)：無条件許可1

3)「治療の手びき」編集委員会 委員長 西沢良記
 平成18年度は2006年9月29日に札幌において委員会を開催した。

本委員会では、患者用書籍『糖尿病治療の手びき』の大幅改訂(改訂第54版, 2006年2月刊行)に伴い、その指導者用書籍である『糖尿病療養指導の手びき』の改訂(改訂第3版)作業に取り掛かっていたが、以下の通り進行した。

2006年4月20日原稿締切、8～9月に委員会による原稿査読、9月29日に委員会を開催して査読内容のまとめを行う。その後、10～11月に委員会査読内容に従った原稿の改訂を行い、2007年2月に初校校閲(執筆者・委員会)、3～4月に再校校閲(委員会・理事会)を行っている。現在、5月の第50回日本糖尿病学会までの刊行予定にて最終作業中である。

4)小児糖尿病委員会 委員長 雨宮 伸
 ①「小児思春期糖尿病管理の手びき」改訂第2版(医療チーム向け)
 平成19年5月の年次学術集会にあわせて刊行される。新規治療法などの記載も増えたので、改訂は比較的大幅となった。
 ②国際小児思春期糖尿病学会(ISPAD)について
 國際的に唯一の小児思春期糖尿病を扱う学会である。主に欧米各国からの会員が多いが、日本およびオーストラリアの会員も増加している。各国および各地域の小児内分泌学会との連携が主体であるが、米国糖尿病学会および欧州糖尿病学会や国際糖尿病連合とも連携している。今後日本においても、日本小児内分泌学会と日本糖尿病学会の相互に対し ISPADとの連携が求められる。ISPAD consensus guidelines 2006-2007として順次項目ごとに機関紙 Pediatric Diabetes

に刊行がはじまっている。

③当委員会の活動方針を検討中である。また、上記①と②のガイドラインの整合性についても検討していく予定である。

5)日本糖尿病協会委員会 委員長 佐々木 敬
 (1)平成18年度委員会の開催
 平成18年11月3日(祝・金) 第1回委員会
 平成19年1月28日(日) 第2回委員会(学会・協会合同委員会)

(2)本委員会の目的

糖尿病療養の支援・治療の向上、糖尿病対策の推進という大きな目標を実現するため、当学会および日本糖尿病協会両団体が双方の自主性を尊重しながら円滑なコミュニケーションを図るという目的が確認された。

(3)今年度は学会・協会双方が会する初めての会議を開催した。

(4)日本糖尿病協会「登録医」「療養指導医」制度等

日本糖尿病協会「療養指導医」は患者の療養指導に携わる医師という概念からなり、学会の専門医および研修の指導医とは異なる位置づけとなる旨、協会側より説明がなされた。協会「療養指導医」、学会「指導医」それぞれの特色・取得の要件をより明確にする必要性や、「療養指導医」取得のための講習会・研修会への協力などにつき、議論があった。

(5)各委員長の選出

当学会は佐々木敬委員、協会は伊藤千賀子委員を委員長として選出した。

6)選挙管理委員会 委員長 河盛隆造
 委員 柳澤克之 山田憲一 斎藤宣彦 榊原文彦
 西沢良記 谷澤幸生 榊田典治

昨年同様に従来7月頃に開催していた第1回の委員会のこの時期の開催は見送った。その代わりに、郵便、e-mail等を利用して委員会活動を進めていくこととした。従来の申し合わせに従い、理事会推薦の河盛隆造委員が委員長となり、以下の事項を確認した。

(1)19年度会長選挙の手順について

前年度「会長選挙手順」を踏襲し、

- ・支部からの推薦締切日は平成18年11月15日(水)とする。
- ・推薦された方の意思確認は11月30日(木)までに事務局必着とする。
- ・理事長への報告は12月4日(月)までに行う。
- ・12月10日(日)の定例理事会で、最終候補者3名を決定する。
- ・候補者の所信のフォーマットは前年度と同様とし、

平成 19 年 1 月 12 日(金)を締切日とする。

(2) 候補者の所信が集まった時点で委員会を開催し、以降の進め方について協議検討する。

第 53 回会長候補者の推薦は従来の手順を踏襲し、平成 18 年 12 月 10 日に開催された理事会にて最終候補者 3 名を決定した。各候補者の所信は平成 19 年 2 月 4 日に開催された委員会で精査した後、学術評議員に郵送し、ホームページに掲載した。

学術評議員会での投票にあたって次の様に執り行うこととする。

①投票作業は、基本的に候補者のいない支部の委員があたることとして、不足の人員は候補者のいない支部の出席学術評議員の中から委員長が合計 8 名まで指名する。

②投票用紙を配布・回収する間は、会場を閉鎖する。

③得票数は公表する。

④最終決定は、単純最多得票者とする。

なお、以上は、投票に入る前に会場に公告する。

7)「糖尿病学の進歩」プログラム委員会

委員長 門脇 孝

第 42 回糖尿病学の進歩に向けてのプログラム委員会が 5 月 20 日(日)に開催され、Post graduate を意識したプログラム作りを通じて、専門医試験受験者に有益な知識が習得できるような配慮が必要であることが確認された。また、「糖尿病学の進歩」の会場内では、撮影や録音を禁止する方向で検討することとした。

8) 内科系学会社会保険連合 委員 渥美義仁 委員 河盛隆造、加来浩平、渥美義仁

平成 18 年春の保険改定では、学会の要望項目のうち HbA1c の測定が 2 百床以上の病院で復活した以外は、要望項目のうち HbA1c とグリコアルブミンの併施と非インスリン使用患者での血糖自己測定が改定決定直前まで検討されたが認められなかった。改定全体は 3.16% の大幅減額と厳しい内容であった。内科系社会保険連合の会合では、厚生労働省より医療保険制度の今後の方向として、高齢患者の自己負担増、後期高齢者医療制度創設(平成 20 年度から)、高額医療費の自己負担限度額の引き上げなどが説明された。さらに、診療報酬体系の簡素化、患者視点の重視、生活習慣病等の重症化予防に係る評価などが基本姿勢であると説明された。平成 20 年度の改定に向けては生活習慣病重症化予防という点を一段と強調して要望する予定である。具体的には、前回の要望項目の中から、厚生労働省と最後まで打ち合わせた血糖自己測定の非インスリン使用患者への拡大と、HbA1c とグリコアル

ブミンの併施、栄養食事指導を中心とした療養指導の見直し、などを要望する予定である。

9) 日本医学会に関する報告 評議員 春日雅人

平成 19 年 2 月 21 日に第 74 回定例評議員会が開催された。日本医学会あり方委員会で部会構成について検討され、現行の 9 部会から基礎部会、社会部会、臨床部会の 3 部会に平成 19 年度から変更される改正案が承認された。また、日本乳癌学会の新規加盟が承認された。なお従来、日本医師会から日本医学会に加盟している各学会へ毎年 20 万円の援助がなされていたが、今後は日本医学会に対して一括して援助されることになった。

10) 国際交流に関する報告 理事 清野 裕

(1) IDF-WPR council meeting

2006 年 6 月 29 日～7 月 1 日(東京)

・国連における糖尿病に関する決議

「糖尿病に関する決議」を国連において 2007 年 11 月 14 日までに議決する運動を IDF が企画し、IDF-WPR としても全面的にこれを推進することとなった。日本糖尿病学会は日本糖尿病協会と連携して、外務省に国連において議決の得られるよう運動促進の申し入れを行った。

国連ではバングラディッシュが提案国、G77 が共同提案を行い、96 カ国以上の賛同を目標に活動を展開。我が国でもメディアを介して運動を推進した。

2005 年日本糖尿病学会が拠出したスマトラ沖地震に対する義援会は半分インドネシアの援助に、半分は西太平洋地区のメディカルスタッフの教育に使用することで決着した。

IDF-WPR の役員改選が行われ、Gorden. Bunyan が Chair に、清野 裕理事が Chair Elect に、田嶋尚子理事が Executive member に選出された。

日本糖尿病学会としては、IDF-WPR の活動にケアと教育以外に研究を行うことを提案し、WPR の枠内で日本が各国と協調して行うことが了解された。

[WPR 会計]

IDF からの収入 S\$3,030,000.00 (S\$: Singapore dollar, 1 シンガポールドル = 約 62 円)

支出 S\$4,631,000.00

− S\$1,601,000.00

*S\$1,601,000.00 の赤字をシンガポール糖尿病学会が負担

(2) 日本糖尿病学会は、IDF と連携するために国際交流委員会を改組し、一部糖尿病協会も組み込んで、新たな国際交流委員会を立ち上げた。

(3) 第 14 回日韓シンポジウムは 2007 年 10 月 5 日-6

日, 京都において(会長 清野 裕理事)開催する。

(4)国際交流委員会において日中糖尿病シンポジウムについて取り扱い方を議論し, 日本側の担当と次回会長に南條輝志男理事を推薦した。

(5)第19回IDFは2006年12月3日-8日南アフリカケープタウンに於いて開催された。

Council meetingの主な決定事項として

- 1)次期会長にカメリーンのムバイエ教授を選出
- 2)新副会長の一人に堀田 饒理事を再任
- 3)清野理事がIDF Executive Boardに就任
- 4)国連決議の採択に向けたキャンペーンの展開

(6)IDFの要請した国連での「糖尿病に関する決議」が2006年12月20日に採択され, 国連は11月14日を「世界糖尿病デー」に指定。これを受けて日本糖尿病学会も「11月14日」を含む週を「糖尿病週間に改訂」

(7)国連決議の採択を受けてIDFでは糖尿病についての各国でのキャンペーンを要請, とくにメディアとの連携を強調。日本糖尿病学会では日本糖尿病協会と共に毎日新聞の協力を得て2007年9月30日「糖尿病国連決議をうけてのシンポジウム」を開催予定。さらに11月14日「世界糖尿病の日」の行事について検討を始めた。

(8)第7回IDF/WPR会議(学術集会)は, ニュージーランド, ウェリントンに於て, 2008年3月30日~4月2日に開催される。日本から多数参加するよう要請があった。

(9)IDF, IDF-WPRの活動を活発にする必要があることから, 国際交流委員会における専従職員の必要性も指摘され, 早い時期に結論を出すこととなった。

・国際糖尿病連合(IDF)に関する報告

IDF Vice President 堀田 饒

国際糖尿病連合(IDF)の会議で, IDF-WPR(国際糖尿病連合西太平洋地区)の会議を除いて以下である。本会議とその関連で3回, 第19回World Diabetes Congress, Cape Town 2006への出席である。

本会議(理事会)は, 2006年5月5-7日にデンマークのコペンハーゲン, 2006年9月18日にデンマークのコペンハーゲンそして2006年12月3日南アフリカのケープタウンで, その主たる討議内容は“UN Resolution on Diabetes(糖尿病の国連決議)”の国連での採択に向けた議論であった。“糖尿病の国連決議”は, IDFを中心とした活動の功があつて, 2006年12月21日に国連に於いて正式に採択された。従来, エイズなどの感染症疾患を除いて, 非感染性疾患では国連決議は未だなく, この度の糖尿病がはじめてで画期的な出来事である。バングラデシュが提案国となって決議採択となった。決議の主な骨子は, ①2007年から

11月14日は国連が定める“糖尿病の日”とし, 国連加盟国に対し施行を求め, ②世界各国が国家的見地から糖尿病の予防, 治療および保健システムに対する施行の策定を奨励している。この決議にはアジア, アフリカなどの発展途上国が多くと先進国のアメリカ, オーストラリア, カナダ, 日本などが支援に動き, 果たした役割は大きく, 各国の対糖尿病戦略に大きな力となることに疑う余地はない。

2006年12月3日南アフリカのケープタウンで開催されたIDF Council Meetingで, 次期President(2010-2012)にカメリーンのJean-Claude Mbanya教授が投票で選ばれ, 堀田饒もVice-Presidentに再選された。2007年3月15日ニューヨークで, IDF主催で国連決議の採択に提案国となっていたバングラデシュの尽力に対して, 表彰の集いが開催され, 出席した。尚, 第20回のWorld Diabetes Congressは2009年10月18~22日にモントリオールで開催される。

IDFの活動に出版事業がある。Diabetes Atlasの3rd Editionが2006年に出版された。2006年度は, IDF機関紙“Diabetes Voice”4回/年が出版され, 特集号として“The metabolic syndrome”, “Insulin and diabetes supplies”そして“A digest of the Global Guideline for Type 2 Diabetes”が追加されている。IDF-WPRの機関紙は12回/年が順調に出版され, supplementも2回発行されている。尚, 表紙デザインが2007年の1月から刷新された。

11)学術調査研究・教育に関する報告

理事 門脇 孝

新規に5件の申請があり, 審査の結果「糖尿病運動療法・運動処方確立のための調査研究」が採用され, 「糖尿病関連検査の標準化に関する委員会」については今後も継続することとした。また, 現在他の3件について審査中である。

(1)糖尿病関連検査の標準化に関する委員会(第二次

開始: 1998年7月23日) 委員長 富永真琴
委員会の開催: 平成18年5月25日(東京都)

①HbA1cの標準化について

国際的にはIDF, ADA, EASDはHbA1cをMBGとしてレポートすることを提案し, 現在, 糖尿病患者を対象としてHbA1cとMBGの換算式の係数を求める臨床研究が進行中であるが, 本委員会としては賛成しかねることを確認した。

HbA1c(IFCC値)の基準範囲を設定する試みを2005年に実施し, 3.0~4.1%であった。これを委員会報告として投稿した。

HbA1c測定用の標準物質は日本臨床検査標準協議

会(JCCLS)でCRM-004aという名称で認証され、6月から有償配付される。「糖尿病」の「お知らせ」欄でこのことが周知されるように掲載を申し出ることにした。

この過程で、現状でHbA1c日常測定においてメーカー間差の存在が疑われたが、この対処については、本委員会を引き継ぐ委員会の検討事項にして頂くことにした。

②GAの標準化について

ペプチドマッピングによるGAの測定法の開発が進行中で、リジン525を測定対象とする方法とトータルの糖化リジンを測定対象にする2つの方法で検討中である。この検討は本委員会の下部に設けられたワーキンググループで実施されているが、本委員会を引き継ぐ委員会でも引き続き検討できるようにしたい。

③テストミールBの検討

テストミールAの脂質構成割合を下げたBが検討中であるが、検討例数が満たされた段階で投稿することにした。

④次期委員会について

昨年12月の定例理事会で、糖尿病関連検査の標準化に関する委員会を常設の委員会として設置することが承認されたので、新規委員会による活動の継続と発展に期待している。

(2)遺伝子異常による糖尿病に関する調査研究委員会(開始:1996年8月11日)

委員長 南條輝志男

分子生物学の急速な進歩により糖尿病の原因となる遺伝子の異常が次々と明らかになってきている。本委員会はそのような現状を受け、①本邦における遺伝子異常による糖尿病の実態調査、②遺伝子異常による糖尿病に対する理解の普及の二点を主な目的として活動を行ってきた。①に関しては、「ミトコンドリア異常による糖尿病」の実態調査を行い、その結果を、学会誌「糖尿病」に掲載した(47:481-487,2004)。また、②に関しては、「一般臨床に携わっている方が、どのような特徴を有する糖尿病患者さんを診察した場合に、遺伝子異常による糖尿病を疑つたらよいか」をテーマに「糖尿病遺伝子診断ガイド」を委員会として執筆、発刊した。さらに、「一般臨床に携わっている者が、遺伝子異常による糖尿病を疑つても、なかなか遺伝子解析を行うことが困難である」とのご意見をいただいたのを受け、MODY3の原因遺伝子であるHNF-1 α 遺伝子を対象に患者さんのDNAの解析支援を行ってきた。合計65症例の検索依頼があり、MODY3が疑わしい21症例に関し解析を行い、5家系で糖尿病の発症に関する遺伝子変異が同定されている。本解析支援

に関しては現在も委員会のほうに継続して問い合わせがあるが、昨年12月末で受付を終了、依頼施設での倫理委員会通過待ちの4症例の解析を今後行い終了の予定である。

(3)糖尿病の一次予防に関する調査研究委員会(開始:1999年9月23日) 委員長 小林 正

これまでの内外での一次予防に関する大規模研究を中心にまとめ、これから実地適応に向けた現在での日本対応について、委員会としてまとめ、委員会報告とする。

(4)糖尿病の死因に関する調査研究委員会(開始:2000年10月30日) 委員長 堀田 饒

委員: 岩本安彦、大野良之、春日雅人、吉川隆一、豊田隆謙、中村二郎(50音順)

第三次(1991-2000年)糖尿病患者の死因に関する調査結果が雑誌「糖尿病」50(1):47-61,2007に掲載された。これをもって、当委員会の活動を終了とした。

(5)劇症型及び緩徐進行1型糖尿病調査研究委員会(開始:2000年7月15日) 委員長 牧野英一

(i)劇症型糖尿病調査委員会報告

劇症1型糖尿病発症5年後に既に網膜症、腎症、神経障害を発症する症例が多数認められることを報告した(Murase Y et al. Diabetologia 50(3):531-7,2007)。妊娠合併例の発症頻度などを報告した(川崎英二他:糖尿病と妊娠 6(1):104-7,2006)。発症時に肝機能障害が高率に認められることを明らかにした(Takaike H et al. 論文投稿中)。インスリン注射を契機に2型糖尿病より1型糖尿病に移行した症例の全国調査を行いその解析を進めている。年齢別・性別の臨床的特徴及びウイルス抗体価について検討した(投稿準備中)。また、IA-2抗体単独陽性1型糖尿病の疫学調査が進行中である。

(ii)緩徐進行1型糖尿病調査委員会報告

①委員会施設における糖尿病発症5年以内の多施設間前向き検討: 現在まで528検体を集積し、「2型糖尿病」中に約9%の膵島抗体(GAD抗体 and/or IA-2抗体 and/or IAA)陽性例を認めた。GAD抗体陽性率は他の抗体と比べて有意に高頻度であった。今後さらに症例数を増やすとともに、その自然経過の前向き観察を行っていく。

②全国調査: 現在まで46施設の登録を受けている。さらに登録を増やし緩徐進行1型糖尿病の実態を明らかにし、診断基準の作成を行う。

③その他

1型糖尿病の病型別遺伝子因解明を目的として、

HLA 領域に密に設定した SNP マーカーならびに HLA 以外の候補遺伝子約 170 の SNP 約 270 に関して網羅的解析を行い、1型糖尿病約 700 例を対象に各病型(自己免疫性、劇症、緩徐進行)との関連を解析し、1型糖尿病に共通の遺伝子と各病型特有の遺伝子の両者の存在を見いだした。

(6) 食事療法に関する検討委員会(開始: 2001 年 9 月 30 日) 委員長 津田謹輔

食事療法にエビデンスがあるのか、なければ作るようとの指示で 2001 年 9 月に発足。5 年経過し閉じることになった。この委員会としての総括と残務作業を話し合った。

発足当時の課題として

(i) 現行の食事療法が科学的な根拠に基づいているかどうかを検証し、さらには ADA が Clinical Practice Recommendation で提唱しているような食事療法のガイドラインを日本でも提言する。

これが委員会の当初の目的であったが、そのころ厚生省(当時)医療技術評価総合研究事業として「科学的根拠に基づく糖尿病診療ガイドラインの策定に関する研究」が行われ公表され委員会の出番はなくなった。

(ii) 食事療法個別の問題点について

① 文献的考察

食事療法に関わる三大栄養素、栄養素の比率、食物繊維やビタミンなど微量栄養素など食事療法の問題点につき委員が分担し、食事療法の文献を検討し議論した。まとめとして委員会主催で、食事療法に関する公開シンポジウム(2005 年 2 月 13 日、東京)を開催した。概要は「エビデンスからみた糖尿病食事療法」という特集で Diabetes Frontier 16(4), 2005 にて紹介した。

② 食事療法の現状把握と患者の QOL

糖尿病学会評議員の協力による調査(601 例)と臨床糖尿病医会の協力による調査(256 名)により、食事療法の現状、SF36 を用いた患者の QOL を検討した。委員会報告予定。

③ 糖尿病患者におけるエネルギー消費量の測定

京都大学と日本医大にて、指示エネルギー量の基礎になる糖尿病患者の安静時代謝を呼吸代謝測定システム(ミナト医科学)にて測定している。一部のデータは糖尿病学会、肥満学会で報告。

④ 特定保健用食品データベース

食事指導のうえで、しばしば話題になる特定用保健食品であるが医療担当者に情報が少ないので現状である。日本糖尿病協会さかえ編集委員会からの要望もあり、企業から特保申請の論文を提出していただき、データベースを作成した。書籍にする予定であったが、

学会誌サプリメントとして発行したく投稿中。

(7) アジア人糖尿病調査研究委員会(開始: 2001 年 11 月 18 日) 委員長 南條輝志男

本委員会は平成 13 年度に「アジア人共通の糖尿病臨床像の把握およびその原因の解明」を目的に発足し、アジア各国(韓国、中国、台湾、香港、モンゴル、フィリピン、タイ、インドネシア、シンガポール、マレーシア)と共同で 1 型および 2 型糖尿病の疫学調査および栄養調査を行なってきた。本委員会発足以後毎年の日本糖尿病学会年次学術集会において必ずアジアセッションが設けられるようになっており、本委員会はアジア各国との国際交流にも重要な役割を果たしてきたと自負している。平成 18 年度において本委員会を一旦終了する(延長の場合は見直し、改組などが必要)との糖尿病学会よりの方針に対し、本委員会では以下の結論に達した。

① 本委員会は一旦終了する。

② 本委員会の成果報告については委員会報告としてまとめて、雑誌「糖尿病」に投稿する。現在投稿準備中である。

③ 本委員会の活動によりアジアにおける国際協力、国際交流、共同研究のネットワークが構築された。アジアでの国際交流は極めて重要であり、今後も同様の活動を継続する必要がある。国際交流委員会などで本委員会で構築されたネットワークを活用し、アジアにおける国際交流活動(アンケート調査などの簡単な調査も含む)を続けていただくよう要望する。

④ 上述のようにこれまでの本委員会の活動によりアジアにおける国際共同研究のネットワークが構築され、今後本格的共同研究を行なう下地が形成された。そこで、焦点をメタボリックシンドロームに絞った調査研究委員会を立ち上げ、WPR 加盟国を対象に検討を行なうことを提案する。

(8) 糖尿病性神経障害の実態調査と国際比較調査研究委員会(開始: 2003 年 5 月 13 日)

委員長 堀田 饒

委員: 渥美義仁、岩本安彦、大野良之、佐々木秀行、中村二郎、馬場正之、安田 斎

e-mail による委員会を開催した結果、今後の活動方針を以下のようにすることとなった。「データベース構築委員会」による糖尿病性合併症に関する前向き調査研究が開始される予定であり、本委員会が計画している実態調査の内容および対象施設と重複することを考慮する必要がある。これまで本委員会で検討された神経障害に関する調査項目は、「データベース構築委員会」によるものよりも詳細であり、「データベース

構築委員会」において登録されるすべての症例で検討することは不可能と考えられる。神経機能検査などの詳細な調査項目を「データベース構築委員会」の調査用紙にオプションとして追加することとし、「データベース構築委員会」による糖尿病性合併症に関する前向き調査研究と同時進行の形式をとる予定である。

(9)妊娠糖尿病の定義・スクリーニング、診断基準の再評価に関する調査研究委員会(開始：2003

年10月5日) 委員長 豊田長康

委員：岩本安彦、河盛隆造、折笠秀樹、
伊藤千賀子、穴沢園子、佐中真由実、
和栗雅子、平松祐司、鮫島 浩、
三田尾 賢、安日一郎、杉山 隆

妊娠糖尿病(gestational diabetes mellitus: GDM)に関する定義、スクリーニング法、診断基準という基本的事項について、わが国の統一した概念に基づく疾患として扱うべく、EBMに基づいた観点から、また、国際的な指針との整合性を考慮に入れた観点からの再評価を行う必要があると考え、本委員会が発足された。

2005年11月に The Fifth International Workshop-Conference on Gestational Diabetes Mellitus(以下第5回GDM国際会議と略)がシカゴにおいて開催されたが、本会議では、現行の妊娠糖尿病の定義を変更せずに継続することとなった。またGDMの診断基準については、HAPO(hyperglycemia and adverse pregnancy outcome) studyなるRCTの結果が出るまでは、現行の診断基準を用いることが現実的な対応であるとされた。

また、わが国における妊娠糖尿病のスクリーニングに関する多施設共同研究がさらに進行し、妊娠初期ならびに妊娠中期において各種スクリーニング法の精度分析およびコスト分析がなされた。それによると、妊娠初期に妊娠糖尿病の約8割が発見されること、妊娠初期については随時血糖値(カットオフ値95 mg/dl)が、妊娠中期においてはブドウ糖チャレンジテスト(カットオフ値140 mg/dl)が、精度分析およびコスト分析の結果からスクリーニング法として妥当であるという結果が得られた。

本調査研究委員会は会議を開催し、上記の新たな情報をもとに、「妊娠糖尿病の定義、診断基準、スクリーニング法に関する提言」を作成した。これを最終稿として理事会に提出する予定である。

(10)日本人におけるインスリン分泌とインスリン抵抗性に関する実態調査研究委員会(開始：2004

年7月19日) 委員長 清野 裕

本委員会は日本人のインスリン分泌能とインスリン抵抗性の実態を調査し、それを評価するための検査法や結果の解析法を確立すると共に、今後標準的な評価法を提唱するため設置された。すでに15名の委員が、それぞれの施設における調査経過の報告を終えた。また各施設からのデータ収集を開始し、経口糖負荷試験では20,000例、グルコースクリアランスでは700例、ミニマルモデルでは500例、グルカゴン負荷試験では1,000例を超えるデータが集積されつつあり、議論を重ねながら最終的に全国的なレベルで多数例の解析を行い、実態に沿った基準の提案を行う。上記以外にも、HOMA指数、体脂肪分布、肥満・脂肪細胞関連因子、炎症関連因子などについてのデータを集積し、種々の評価方法に基づいて解析中である。北から南まで全国レベルで、多くの施設からのデータを、多数例について集積して、日本人のインスリン分泌能とインスリン抵抗性の実態解明が可能となっている。

本年度はシンポジウムを開催し、海外から本研究テーマに精通する研究者2名を招いて講演を依頼するとともに、海外の研究結果とわが国の研究結果を比較することで、日本人におけるインスリン分泌とインスリン抵抗性に関する特徴を明確にする。また参加者から得られたデータを専門のシステムエンジニアとともにデータベース化し、多数例の集計成績を構築するとともに、客観的で精度の高い解析を行っている。

これまで1年目に4回、2年目2回の委員会を開催し、調査結果の公表やデータ収集など着実に成果を挙げ、3年目にはシンポジウムを開催し、幅広く学会員の意見を集約した。4年目には収集したデータから得られた解析結果に基づく、我が国のインスリン分泌、インスリン抵抗性の実態調査の報告と、臨床的な指標などについての提言も行う予定で、4年で一区切りとする。

(11)若年発症2型糖尿病の実態に関する予備的調査

研究委員会(開始：2006年5月24日)

委員長 岩本安彦

平成18年5月に新たに理事会で承認され、発足した本委員会は8月に第1回の委員会を開催した。委員会では、研究実施計画書(案)について検討を行い、概要を決定した。その後も、外来で対象患者を抽出しやすいように対象の設定を練り直し、委員長の所属する医療機関と日本糖尿病学会の倫理委員会の承認を得ることができた。全国専門施設に、説明文書をはじめ同意書、調査用紙を配布し、予備的調査を終え、平成19年度中にまとめを行う予定である。

(12)糖尿病・糖代謝異常にに関する診断基準検討委員

会(開始:2006年5月24日)委員長 門脇 孝
2007年1月28日(日)に第一回委員会を開催した。
6月17日(日)に第二回委員会を開催し、空腹時血糖値に関する診断基準について、わが国におけるエビデンスに基づき集中的に討議する予定である。

12)平成19年度坂口賞および学会賞に関する報告

1)坂口賞は、井出健彦氏、奥野巍一氏、吉川隆一氏、豊田隆謙氏、堀田饒氏、丸山博氏に授与する。

2)学会賞審査委員会(委員長 清野 裕)を平成19年1月12日に開催し、各受賞者を選出した。

①平成19年度ハーゲドーン賞

該当者なし

②リリー賞

- i 片桐秀樹(東北大学大学院医学系研究科附属創生応用医学研究センター再生治療開発分野)「自律神経系を介した臓器間ネットワークによる糖・エネルギー代謝の協調的調節機構」
ii 山縣和也(大阪大学大学院医学研究科内分泌・代謝内科学)
「膵β細胞転写因子によるインスリン分泌制御とその破綻」

13)学会認定事業に関する報告

(1)専門医認定委員会 委員長 清野 裕
委員会は小委員会も含め7回開催された。平成18年度の専門医試験は318名が受験し、193名が合格した。研修指導医は74名(随時審査も含む)、専門医研修認定教育施設は43施設(無床3施設含む)が認定された。更新は専門医466名・指導医170名・認定教育施設71施設であった。専門医試験の合格率が低下しており、糖尿病を目指す医師の減少などの問題もあるため、専門医像・試験の内容などについて、専門医試験委員会と意見交換を行なった。引き続き連携をとり検討していく。専門医はチーム医療・患者教育への貢献は不可欠であるとし、患者教育に取り組むことを専門医更新の条件として規則を改訂することになった。

(2)試験委員会 委員長 荒木栄一
平成18年5月26日、第24回試験委員会を開催し、第17回専門医試験の試験方法と出題問題の作成分担、口頭試験担当者、試験監督担当者を決めた。7月23日に委員長、数名の委員により試験問題のチェックを行い、9月29日に委員全員で試験問題の選定を行った。第17回専門医試験は、平成18年10月22日、全共連ビルにおいて実施した。受験者は318名で、11月19日に合否判定案を決定、11月19日専門医認定

委員会に報告、193名の合格(合格率61%)が承認された。

第18回(平成19年度)の試験は平成19年10月28日(日)都市センターで、第19回(平成20年度)の試験は平成20年10月26日東京国際フォーラムでの実施を予定している。

14)学会設立50周年記念事業に関する報告

(1)記念誌委員会 委員長 清野 裕
委員:葛谷 健、島田 朗、寺内康夫、山田祐一郎
ワーキンググループ:大原 育、高本偉碩、
長坂昌一郎、藤本新平、
船江 修(第3回委員会から)

「糖尿病学の変遷を見つめて:日本糖尿病学会50年の歴史」(仮題)は、2007年10月発行予定にて進行している。各項目についての進行状況および今後のスケジュールは、以下の通りである。

(i)グラビア

・掲載候補を挙げ、写真を収集中。写真収集については、各メーカー、会員の先生に個別に問い合わせをしている。一部のものについては入手可能であることを確認済み。現物の撮影は4月中旬頃を予定。

・4月中には収集を終了する予定。

(ii)年表

・内容は、編集委員会の確認を経てほぼ確定し、レイアウトを検討中。

(iii)日本糖尿病学会の歩み

・執筆者による会議を行い、全章を通しての整合性を図っている。
・第1章の内容については保留。これに伴い、第2章の冒頭も保留。現時点で、第1章の入手時期は未定。
・第3章~第6章は脱稿済み。

(iv)TOPICS

・3月末の最終締切りにて原稿作成を依頼。全12本のうち7本は脱稿済、1本は共著者が分担執筆中、4本は座長による原稿執筆中。

・脱稿いただいた原稿から順次、編集委員会にて原稿内容を確認している。必要に応じて加筆・削除等の修正を依頼し、著者より再提出いただいたものを最終稿とする。遅くとも2007年4月中には最終稿の脱稿を目指している。

(v)座談会:新たな50年を見据えて—糖尿病学の今後の展望(仮)

・編集委員の寺内康夫座長のもと12月22日に開催した。
・座談会後、テープ起こしを各先生に送付し、内容

についてのご修正・ご確認をいただいた。現在、その結果をふまえて、座長が最終的に取りまとめている。2007年4月中に出席者全員に著者校正を依頼予定。

(vi) データで見る日本の糖尿病学

- ・担当者がたたき台を作成。現在、仮にレイアウトを作成中。その後、内容を編集委員会にて検討し、4月中に最終版を作成する予定。

(vii) 日本糖尿病学会の歴史について

- ・事務局およびエディットにて作成中。作成後、編集委員会にて検討し、4月中に最終版を作成する予定。

コラム「学会の50年に想いを寄せて」

- ・6本中2本は、執筆を辞退された。(坂本信夫先生、平田幸正先生)4本は脱稿済。

(viii) 座談会：日本糖尿病学会設立50周年記念誌作成にあたって—糖尿病学の50年をどう切り取ったか(仮)

- ・本項を除く他の項目の内容をふまえて、2007年4月7日に座談会を開催。4月末頃、テープ起こしの校閲を依頼予定。

今後の全体スケジュールについて

- ・発行予定を9月末から10月末に延期して、未脱稿の原稿をお待ちしている。最終締切りの3月末までにご脱稿がない場合には、11月の式典までに発行できない可能性がある。
- ・執筆原稿については、基本的に2007年4月中に、著者へ校正刷り確認の依頼予定。
- ・著者校正後の2007年5月頃、編集委員会にて全体を通して確認し、不明点等については著者へ問い合わせる。なお、全項目の記載内容について、「年表」との突き合わせを行い、整合性を図る。
- ・2007年8月頃、印刷開始予定。

(2) 記念式典委員会 委員長 岩本安彦
平成18年9月3日(日)に開催された式典・シンポジウム合同委員会で下記スケジュールを立案し、それに基づき、会場となる東京国際フォーラムの各部屋の利用予定ならびに用途について11月1日(水)に事務局・東京国際フォーラム・担当業者で打ち合わせを行った。

なお、参加方法等の詳細については、学会誌ならびに学会HP等で発表する。

学会設立50周年記念式典・祝賀会プログラム(案)
開催日時 平成19年11月10日(土)午後3時から
会 場 東京国際フォーラム ホールC・B5

| 記念式典 会場 ホールC | 祝賀会 会場 ホールB5 |
|-----------------------|----------------|
| 14:00 受付開始 | 18:00 祝賀会開会の挨拶 |
| 15:00 開会の挨拶 | 来賓祝辞 |
| 15:05 来賓祝辞 | 乾杯 |
| 16:00 永年功労者表彰 | 挨拶 |
| 16:10 祝電披露 | 謝辞 |
| 閉会の辞 | |
| 16:30 設立50周年記念 講演会 | 20:00 閉会の辞 |
| 小坂樹徳名誉会員 | |
| Prof. Martin Silink | |
| Prof. C. Ronald Kahn | |
| 17:30 閉会・休憩 | |

(3) 記念国際シンポジウム委員会 委員長 小林 正
平成19年11月11日(日)9:00-17:00、国際フォーラム、ホールC会場にて、10人の海外からの招待講演者を迎える。現在の糖尿病学のトピックス、レビューなどの講演のあと、約1時間30分糖尿病学の研究の方向性、糖尿病対策のあり方、若い糖尿病研究者や専門医の養成のあり方、国際連合の対糖尿病対策決議を受けての各国での対策のあり方などについて、講演者全員によるパネルディスカッションを行う。英語で行い、通訳はなく、参加費として2,000円(当日の昼食代を含み、前夜の懇親会に参加すれば2,000円追加、計4,000円)を徴収する。招待講演者として、Graeme Bell, John A Todd, Jaakko Tuomilehto, Steven M Haffner, C Ronald Kahn, George King, K Borch-Jonsen, Michael Brownlee, David Kelley, Martin Silink(IDF会長)が予定されている。

15) 分科会に関する報告

日本糖尿病合併症学会 堀田 饒

日本糖尿病学会の分科会である日本糖尿病合併症学会は、平成18年10月6, 7日の2日間に亘って八木橋操六会長(弘前大学医学部病理学第一講座教授)の下、第21回日本糖尿病合併症学会として弘前市の弘前文化センターおよびホテルニューキャッスル弘前にて開催された。

学会は、シンポジウム5題、そして一般演題は例年通り全てワーク・ショップ形式で行われた。市民公開講座も10月7日に弘前文化センターでもたれた。本学会が設けた学会賞の各賞の受賞者は以下の各先生で、Outstanding Foreign Investigator AwardはDavid R Tomlinson教授(Faculty of Life Sciences, University of Manchester), Distinguished Investigator Award: 原納 優(児童会生活習慣病センター), 村瀬敏郎(沖中記念成人病研究所), Expert Investigator Award: 河盛隆造(順天堂大学医学部内科学・代謝内分泌学講

座), Young Investigator Award : 荒木信一(滋賀医科大学内科学講座), 植木浩二郎(東京大学大学院医学系研究科糖尿病・代謝内科), 成瀬桂子(愛知学院大学歯学部内科学講座).

平成19年に予定されている第22回日本糖尿病合併症学会は, 山田信博会長(筑波大学大学院人間総合科学研究科(医学分野)代謝・内分泌制御医学)の下, 10月26, 27日の2日間に亘って, つくば国際会議場を会場にして開催されることが決定している. 学会の機関誌「糖尿病合併症」は抄録号を含め, 3回発行された.

16) 糖尿病総合対策への取り組みに関する報告

(1)「対糖尿病戦略5ヵ年計画」作成委員会

委員長 門脇 孝

2006年9月7日(木), 2007年3月18日(日)に「対糖尿病戦略5ヵ年計画」作製委員会を開催し本計画の実施状況を評価した. 各界への説明・働きかけにより, 二本柱の一つである「糖尿病の治療・予防環境の向上」についてはほぼ計画通りの成果をあげている. 一方, もう一つの柱である「糖尿病の本態解明」については, 十分に目標を達しているとは言えない. 2007年4月に発表された新健康フロンティア戦略もふまえて本計画の改訂作業を進めている.

(2)「健康日本21」の糖尿病対策委員会報告

委員長 伊藤千賀子

(i) 委員会開催: 平成18年10月29日(通算11回)と12月17日(通算12回)の2回開催し, 必要に応じて委員間でe-mailを用いて討議した. 前者は「治療のエッセンス」を, 後者は日本糖尿病対策推進会議の活動評価方法を討議した.

(ii) 委員会活動と糖尿病対策推進会議の経緯

平成17年に発足した日本糖尿病対策推進会議からの要望に添う形で, 糖尿病対策の方針を立て, ツール等を作成してきた. 17年3月に「糖尿病治療のエッセンス」を, 4月にチラシ等を作成して会員に配布した. しかし, 日本医師会会長の交代があったので, 4月20日に春日理事長が唐澤祥人日本医師会新会長を表敬訪問して今後の問題を討議した. 医師会長は糖尿病対策は非常に重要な問題であり, 引き続き進めたいとの方針を示した.

(iii). 日本糖尿病対策推進会議の活動(2006-4-1~)

幹事会開催: 日本医師会の新役員との幹事会は2006-6-5(通算4回), 2006-8-21(通算5回), 2007年1月26日(通算6回)に開催され, 以下の点が討議された. ①活動内容の再確認と地域への働きかけを強化

方法. ②第2回日本糖尿病対策推進会議総会の開催日程を2006-11-22とし, 内容についても討議された. ③現在作成されている糖尿病治療のエッセンスには「インスリン治療」が含まれていないので, これを加え, 新たに市販されている糖尿病治療薬も追記して「糖尿病治療のエッセンス2007年版」を作成することが決められた. 2006-10-29に「健康日本21」の糖尿病対策委員会で改訂内容を検討し素案を作成した. これを受けて2006-11-22に「糖尿病治療のエッセンス」作成委員会(構成3団体から2~3名を選出して設置)が開催され, 原案を若干修正して3月31日に発行された. 日本糖尿病対策推進会議の活動の評価についても討議されたが, 繼続審議となった.

(3) データベース構築に関する委員会

委員長 小林 正

現在日本での糖尿病患者の合併症に関する実態はまだ明確に把握されていない. 本研究は糖尿病患者1万症例のデータベース構築には追跡情報を含め, 出来るだけこれからの大規模前向きのコホート研究などの標準的なものになるように, 日本糖尿病学会, 日本腎臓学会, 日本糖尿病眼学会, 日本歯周病学会の4学会の専門家の総力をあげて, ベストとなるプロトコールを構築し, 現在の日本で大きな問題となっている糖尿病の実態の調査, 及び治療のあり方に十分な資料となるデータの収集を行なうことを主眼としている. 対象となる患者は十分な検査が行なえる大学病院, 基幹病院が主となるが, 一部, 糖尿病患者の多い診療所なども含み, また歯周病に関しては, 歯科の存在する施設で, 追跡することになる. 失明の原因となる網膜症の追跡には, 眼科専門医の所見を含み, 可能であれば眼底4方向の写真も含み, 国際的にも通用するデータの収集を行なう. 糖尿病学会及び腎臓学会の指導医などにアンケート調査を行なった結果, 合計12,000例(目標10,000例)の登録が可能と判明した. 40歳以上75歳までの糖尿病患者を対象とし, 各合併症のエンドポイントを設定し, 5年間データを収集する. 追跡項目については, アンケートの結果, 可及的に入力を容易に出来るように簡素化することにした. 現在の疫学研究に関する倫理指針に沿った手続きをとる必要があり, 糖尿病学会の倫理委員会にて審議し, また研究者の属する大学などの倫理委員会にての審議のうえ, 調査研究を始める. 全国の種々の施設における異なった治療法によりどのように, 腎症, 網膜症, 神経障害という細小血管障害から心血管障害, 脳血管障害などの大血管障害にいたる合併症を抑制しているか, またこれらの患者の長期の追跡により糖尿病患者の死因調査も施行し, 現在の日本における糖尿病の実態を明らかにす

ることは糖尿病の管理・治療のあり方を考える時必要である。特に、日本人の糖尿病網膜症などによる失明、歯周病の実態のデータなども乏しく大規模な日本におけるこのような研究は必要である。これにより適切な治療法のガイドラインの基礎となるデータや糖尿病治療の医療費のあり方に関する基礎的資料が得られる。欧米ではこのような臨床データが多く報告されているが、日本では極めて乏しくこの研究を遂行する必要性は高く、日本糖尿病学会及び日本腎臓学会、日本糖尿病眼学会及び日本歯周病学会が中心となってこれを遂行する意義は大きい。

17) 各種委員会

(1) 糖尿病治療ガイド編集委員会 委員長 岩本安彦

委員：荒木栄一、岩本安彦、柏木厚典、門脇 孝、貴田岡正史、田嶋尚子、南條輝志男

委員会開催 2回：平成 18 年 9 月 28 日(於：札幌)、平成 19 年 2 月 3 日(於：東京)

理事会決定に基づき、「糖尿病治療ガイド 2006-2007」の英文版の刊行に向けて、委員会および持回り審議によって下記のような方針を決めた。

①翻訳者にはクリストファ・レイノルズ氏を選定し、依頼することとした。

②翻訳原稿(案)については、各委員で分担し、順次訂正を行う。

③刊行は、当初 IDF の開催時期に合わせることを考えたが、拙速に進めることを避け、第 50 回日本糖尿病学会年次学術集会(仙台)までに刊行する。

④その間、全体を通じてウィルフレッド・フジモト先生、葛谷 健名誉会員に校閲を依頼する。

⑤英文版のサイズは A4 版と拡大印刷する。

上記方針に基づき、翻訳原案をもとに、各委員および校閲者による持ち回りによる修正作業を進めた。平成 19 年 4 月、大阪で編集委員会を開催し 5 月出版に向けて進行状況につき最終的な打合せを行うこととした。

「糖尿病診療ガイド 2008-2009」の刊行について、2008 年 2 月(第 42 回糖尿病学の進歩開催)までに刊行する方針とし、春から改訂作業に着手している。

(2) インターネット委員会 委員長 田嶋尚子

平成 18 年 5 月 26 日(金)：東京、9 月 30 日(土)：

札幌、および平成 19 年 2 月 18 日(日)：東京の 3 回、委員会を開催した。学会ホームページのリンク、「糖尿病」のホームページへの掲載などの継続的事項については、イ委員会メイリングリストを用いて e-mail で検討した。

(i) 「糖尿病」2000 年第 43 卷 1 号～2007 年第 50 卷 2 号まで、ホームページに掲載済みである(平成 19 年 3 月 26 日現在)

(ii) j-stage での「糖尿病」の英文表記は「J. JDS」とすることで理事会の承認を得た。

(iii) ホームページについて

①バナー広告の契約書を作成した。理事会の承認を受け発効した。

②リンク集を整備した。

③英文ホームページは、4 社から見積を取り、プレゼンテーションを行っていただいた。その結果、アドバンテージ・リンクス社に依頼することで理事会の承認を得た。

(iv) 平成 19 年 4 月 6 日から、糖尿病学会ホームページ(会員のページ)に「科学的根拠に基づく糖尿病診療ガイドライン」の全文を掲載した。

(3) 糖尿病性腎症合同委員会 世話人 羽田勝計

平成 18 年度には 2 回の委員会(第 1 回：5 月 27 日(土)東京国際フォーラム：議長守屋委員、第 2 回：12 月 10 日(日)霞ヶ関ビル 33 階会議室：議長鈴木委員)を行い、日本糖尿病学会・日本腎臓学会の委員および日本透析医学会からのオブザーバーが出席し、以下の議題について討議を行った。

①糖尿病性腎症食事療法指導基準の改訂について：猪股委員が日本腎臓学会の腎疾患食事療法ガイドライン改訂小委員会と調整を行う(理事会にて承認済み)

②慢性腎臓病(CKD)対策についての現状報告(日本腎臓学会より)：日本慢性腎臓病対策協議会の設立と、日本糖尿病学会からの幹事・協議担当者の派遣依頼(幹事：羽田委員、協議担当者：岩本委員を派遣、理事会にて承認済み)、平成 19 年 3 月 11 日(日)主婦会館プラザエフにて、慢性腎臓病啓発イベント『ストップ・ザ・腎不全—わが国の慢性腎臓病対策について—』を開催(合同委員会のこれまでの活動内容を報告)

③糖尿病性腎症病期分類の改訂について：CKD stage 分類との整合性を検討する

④透析患者における血糖コントロールの評価法：透析患者の予後にとって望ましい血糖コントロールの指標に関する study を日本透析医学会で検討していただく

⑤厚生労働省研究事業「糖尿病性腎症の寛解を目指したチーム医療による集学的治療(DNETT-Japan)」の進捗状況について

⑥糖尿病学会データベース構築委員会からの報告

(4) 移植関係学会合同委員会臍臓移植中央調整委員会・臍器移植関連学会協議会報告

委員長 谷口 洋

(i) 移植関係学会合同委員会臍臓移植中央調整委員会

平成18年度は平成18年9月7日および平成19年3月30日に臍臓移植中央調整委員会が開催され、金澤康徳委員長より臍臓移植適応レシピエント候補者の臍器移植ネットワークへの登録サービス活動、本委員会の下部組織である全国7地区の適切なレシピエントを判定する地域適応検討委員会の症例検討作業並びに臍臓移植実務者委員会が順調に機能していることの報告があった。その結果として2007年3月26日現在283人(臍腎同時251人、臍単独32人)移植希望申請があり、157人(臍腎同時132人、臍単独25人)がネットワークに登録されていること、また臍器移植法実施後の2000年4月から2007年2月末までに実施された臍臓移植は34例(臍腎同時移植29例、臍単独移植[腎移植後]5例)で、その内移植臍は4例、移植腎は2例を除いて全例生着し、インスリンならびに透析離脱していることの報告がなされた。さらに、筑波大学附属病院、千葉大学医学部附属病院、兵庫医科大学病院の臍臓移植施設辞退を受け、新しく臍臓移植施設として、申請のあった8施設のうち新潟大学医歯学総合病院、独立行政法人国立病院機構千葉東病院、東京医科大学八王子医療センター、奈良県立医科大学病院を移植関係学会合同委員会に申請することが決定された。

(ii) 臍器移植関連学会協議会

平成18年9月25日および平成19年1月13日に臍器提供および臍器移植に関わる諸問題を協議する臍器移植関連学会協議会が小柳仁代表世話人の下で開催され、臍器移植法改正案の議論に資するため、平成9年臍器移植法成立以来平成18年9月までに臍器提供情報のあった1154件中、法律に基づいて48例の脳死判定がなされ、内47例から脳死下臍器提供がなされているという厚生省研究班の紹介、国会議員やマスコミの勉強会に外科系のみならず内科系学会専門医の協力依頼があった。さらに、脳死下臍器提供が希少である現状を鑑み、大学病院、救急救命センターを含む4類型施設に搬送された臍器提供意思表示者の臍器提供を救済するため「レシピエント選択と移植実施施設への情報タイミングに関する要望」として厚生労働省令改定を厚生科学審議会疾病対策部会ならびに厚生労働省臍器移植対策室長に要望したこと、平成18年度診療報酬改定で同種死体臍移植、同種死体臍腎移植が保険適用となり臍器移植・臍器提供の費用配分が可能になったこと、平成18年10月31日現在146例の臍臓移植待機患者があり16例が待機中に死亡したことが報

告された。

(5) 糖尿病学用語集編集委員会 委員長 石塚達夫

平成18年12月に新たな糖尿病学用語集編集委員会を以下の様に組織し、第3版の発行にむけて準備を開始した。石田 均前委員長をはじめ編集委員のご努力により、平成17年11月に更に充実した第2版が発行されてまだ日も浅いが、まずは学会評議員の方々のご意見を伺って行きたいと考えています。今後関係各位からのご助言を受けて作業を進めていく予定です。

委員長：石塚達夫(岐阜大学総合病態内科)

副委員長：池上博司(近畿大学内分泌・代謝糖尿病内科)

委員：吉岡成人(北海道大学第2内科)、檜尾好徳(東北大学分子代謝病態学)、内村 功(東京医科歯科大学内分泌代謝内科)、佐倉 宏(東京女子医科大学糖尿病センター)、浜田洋司(名古屋大学代謝病態内科)、森田浩之(岐阜大学総合病態内科)、西川武志(熊本大学代謝病態内科)

(6) 専門医取得のための研修ガイドブック作成委員会 委員長 岡 芳知

新しい治療薬や治療法についての記載と全体にわたる追記・削除を行い、改訂3版として平成18年5月に出版した。

(7) 倫理委員会

委員長 岩本安彦

① 本学会の調査研究委員会として新たに発足した「若年発症2型糖尿病の実態に関する予備的調査研究委員会」より提出された研究実施計画書および同意書(案)に関して、持ち回りで審議を行い、一部修正の上承認した。

② 本学会の糖尿病総合対策事業の一つとして行われる「データベース構築」に関して、データベース構築委員会より提出された審査申請書ならびに関連書類に基づき、審査を行った。

(8) 科学的根拠に基づく糖尿病診療ガイドライン策定委員会 委員長 田嶋尚子

平成18年度は、2007年1月9日に東京において委員会を開催した。改訂第2版刊行までの進捗状況は以下の通りである。

2004年5月に本書(初版)出版された後、糖尿病診療に関してのエビデンスが集積してきたことから、一昨年度の委員会で改訂第2版を発行することを決定した。改訂第2版は、新たに3つの章(糖尿病における急性代謝失調、糖尿病と臍移植、糖尿病とメタボリックシンドローム)を追加することとした。

2005年12月に原稿を締め切った。その後、2006年4~9月に項目毎の査読会を開催し、9月に委員会全体による全体査読を行った。さらに12月には委員会および理事による初校校正刷りの校閲を行った。

2007年1月9日に委員会を開催し、初校校閲の際に出された指摘等について詳細に検討した。各項目の執筆者は、ここで検討された内容にもとづいて再度改訂を行った。なお、この委員会では、「糖尿病とメタボリックシンドローム」については章とせず「付録」とすることを決定した。

今後は、委員会による再校校正刷りの最終校閲を2007年4月初旬に行い、第50回日本糖尿病学会前(5月20日前後)に改訂第2版を刊行する予定である。

なお、本書の初版については、刊行後より日本医療機能評価機構からMinds上(ホームページ)への掲載を要望されていたが、初版刊行後時間が経過したこともあり、アブストラクトテーブルを含めて全内容を公開することを2006年5月24日の定例理事会で決定した。2007年3月よりMinds上での掲載が開始されている。

4. 「糖尿病学の進歩」開催について

1) 第42回「糖尿病学の進歩」

会期 平成20年2月15・16日(金・土)
会場 サンポートホール高松、他
世話人 石田俊彦(香川医科大学第一内科)

2) 第43回「糖尿病学の進歩」

会期 平成21年2月20・21日(金・土)
会場 松本市(予定)
世話人 相澤 徹(信州大学医学部医学教育センター)

5. 平成18年度収支決算に関する件(河盛理事)

総会で審議の上、18年度収支決算書が承認可決された(本号p558~p570)。

6. 平成19年度事業計画および補正予算並びに平成20年度事業計画および収支予算に関する件(岩本理事・河盛理事)

総会で審議の上、平成19年度事業計画および補正予算並びに平成20年度事業計画および収支予算が承認可決された(本号p571~p582)。

7. 名誉会員の推薦に関する件

今年度は推薦がなかった。

8. 学術評議員の承認に関する件

各支部から選出された598名の学術評議員と理事会

が推薦した八木橋操六、泉 哲郎、小島 至、永松信哉、堀 貞夫、矢田俊彦、小泉昭夫、清野 進、田野保雄、宮崎純一、矢部千尋、蛇名洋介の12会員が総会において承認された。なお、評議員の選出は理事会に一任することが承認された(本号p583~p584)。

9. 次々会長(第53回学術集会)の選任に関する件

学術評議員会にて投票により第53回会長に加来浩平学術評議員が選出され、総会において承認された。

10. 第51回年次学術集会に関する件

平成20年5月22・23・24日の3日間、東京国際フォーラム(東京都千代田区)において開催の予定である。

11. 編集委員、専門医認定委員会・専門医試験委員会委員の交代に関する件

任期満了に伴い各委員会の委員が交代することとなった。

糖尿病編集委員会 2007年度選出委員(2007年度~2010年度)

| | |
|-------|--|
| 北海道支部 | 伊藤 博史 旭川医科大学 第二内科 |
| 東北 | 五十嵐雅彦 山形大学 医学部液性病態診断医学 |
| 関東甲信越 | 寺内 康夫 横浜市立大学附属病院内分泌・糖尿病内科 及川 真一 日本医科大学 第三内科 島田 朗 慶應義塾大学医学部内科 (腎・内分泌・代謝) |
| 中部 | 小泉 順二 金沢大学医学部附属病院 総合診療部 |
| 近畿 | 稻垣 暢也 京都大学大学院医学研究科糖尿病・栄養内科学 西 理宏 和歌山県立医科大学 第一内科 |
| 中国四国 | 江本 政広 山口大学医学部 第三内科 |
| 九州 | 吉成 元孝 九州中央病院 |

食品交換表編集委員会 2007年度選出委員(2007年度~2010年度)

| | |
|-------|------------------------------|
| 北海道支部 | 森川 秋月 旭川赤十字病院 内分泌代謝科 |
| 関東甲信越 | 石田 均 杏林大学医学部 第三内科 |
| 中部 | 井上 達秀 静岡県立総合病院 糖尿病・内分泌代謝センター |

| | |
|------|-----------------------|
| 近畿 | 久保田 稔 関西学院大学保健館 |
| 中国四国 | 四方 賢一 岡山大学大学院医歯学総合研究科 |

治療の手びき編集委員会 2007 年度選出委員(2007 年度～2010 年度)

| | |
|-------|--------------------------|
| 東北 | 大門 真 山形大学医学部 第三内科 |
| 関東甲信越 | 森 保道 虎の門病院 内分泌代謝科 |
| 中部 | 石塚 達夫 岐阜大学医学部 総合診療部 |
| 近畿 | 西沢 良記 大阪市立大学大学院医学研究科 |
| 中国四国 | 末廣 正 高知大学医学部 内分泌代謝・腎臓内科学 |

専門医認定委員会 2007 年度選出委員(2007 年度～2010 年度)

| | |
|-------|---|
| 北海道支部 | 柳澤 克之 市立札幌病院 糖尿病代謝内科 |
| 東北 | 渡辺 毅 福島県立医科大学内科学第三 |
| 関東甲信越 | 柴 輝男 三井記念病院 平尾 紘一 H.E.C. サイエンスクリニック 橋本 尚武 東京女子医科大学八千代医療センター |
| 中部 | 古家 大祐 金沢医科大学 内分泌代謝制御学 |
| 近畿 | 永田 正男 神戸大学大学院医学系研究科 老年内科学 黒江 彰 関西電力病院 糖尿病内科 |
| 中国四国 | 山根 公則 広島大学病院 内分泌代謝内科 |
| 九州 | 桶田 俊光 新小倉病院 糖尿病代謝内科 |

専門医試験委員会 2007 年度選出委員(2007 年度～2010 年度)

| | |
|-------|---|
| 北海道支部 | 関口 雅友 札幌厚生病院 第一内科 |
| 東北 | 間中 英夫 山形県立中央病院 内科 |
| 関東甲信越 | 相澤 徹 信州大学医学部 医学教育センター 大野 敦 東京医科大学八王子医療センター 佐々木 敬 東京慈恵会医科大学附属柏病院 |
| 中部 | 笛岡 利安 富山大学医学部 臨床薬理学 |

| | |
|------|--|
| 近畿 | 藤本 新平 京都大学医学部附属病院 糖尿病・栄養内科 古田 浩人 和歌山県立医科大学 第一内科 |
| 中国四国 | 石田 俊彦 香川大学医学部 内科学講座 第一内科 |
| 九州 | 梅田 文夫 福岡市医師会成人病センター |

12. 平成 19 年度選挙管理委員会委員の承認について

細則第 38 条により、下記の様に承認された。

| | |
|-------|--------------------------|
| 北海道支部 | 柳澤 克之 市立札幌病院内分泌代謝内科 |
| 東北 | 山田 憲一 山田憲一内科医院 |
| 関東甲信越 | 林 洋一 日本大学板橋病院内科 3 部門 |
| 中部 | 榎原 文彦 住吉町クリニック 内科 |
| 近畿 | 小川 渉 神戸大学医学部 第二内科 |
| 中国四国 | 久保 敬二 県立広島病院 内分泌・腎臓内科 |
| 九州 | 榎田 典治 熊本県立大学環境共生学部環境共生学科 |
| 会長経験者 | 小林 正 富山大学医学部第一内科 |

13. 「糖尿病学の進歩」プログラム委員会について

細則第 42 条により、下記の様に決定された。

| | |
|--------------------|-------|
| 第 42 回「糖尿病学の進歩」世話人 | 石田 俊彦 |
| 第 43 回「糖尿病学の進歩」世話人 | 相澤 徹 |
| 第 51 回会長 | 門脇 孝 |
| 第 52 回会長 | 柏木 厚典 |
| 学術担当理事 | 門脇 孝 |

14. 幹事の交代に関する件

幹事が交代することとなった。

| | | |
|---|--|---|
| 新 | 木戸良明(神戸大学大学院医学系研究科 糖尿病代謝・消化器・腎臓内科学) | 旧 |
|---|--|---|

15. 学会後援について

申し込みのあった 5 件全部を後援することとした。

1. 第 7 回先進インスリン療法研究会 平成 19 年 12 月 1 日
2. 「メタボリックシンドローム撲滅運動キャンペーク」 平成 19 年 4 月 1 日～平成 20 年 3 月 31 日
3. 第 19 回分子糖尿病学シンポジウム 平成 19 年 12 月 8 日
4. 糖尿病の予防と治療を目指して—グリコヘモグロビン(HbA1c)認知向上運動— 平成 19 年 6 月

3日, 9月, 11月

5. 第10回糖尿病地域医療研究会総会 平成19年
7月28日

16. 「専門医の更新規定」第5条の変更に関する件

次のように変更することとなった。

| 現行規定 | 改訂案 |
|---|--|
| <p>第5条 専門医の認定更新を希望するものは次項に定める申請書類に更新審査料を添えて専門医認定委員会に提出するものとする。</p> <ol style="list-style-type: none"> 専門医認定更新申請書 症例記録表 学術活動に関する単位数を合計50単位以上取得したこと証明する資料 日本内科学会、または日本小児科学会認定医認定証(写し) | <p>第5条 専門医の認定更新を希望するものは次項に定める申請書類に更新審査料を添えて専門医認定委員会に提出するものとする。</p> <ol style="list-style-type: none"> 専門医認定更新申請書 症例記録表 学術活動に関する単位数を合計50単位以上取得したこと証明する資料 日本内科学会、または日本小児科学会認定医認定証(写し) 糖尿病患者教育に関する資料 <p>※5. を追加する。</p> |

17. 「世界糖尿病デー」に関する件

糖尿病に関する国連決議が採択され、11月14日が「世界糖尿病デー」となったことに伴い、糖尿病学会と糖尿病協会は協力してこれに関する行事を開催し、広報、宣伝に努めることとした。

以上 文責 庶務担当常務理事 岩本安彦